

来日詩人紹介



Cassandra Atherton

カッサンドラ・アサトンさんは、アデレード生まれ、メルボルン育ちの散文詩人・研究者です。ハイビスカスを髪にさし、華やかな衣装に身を包む、その外見からはちょっと想像しにくいかもしれませんが、原爆詩や震災詩についての研究のため、広島に何度も足を運ばれています。

2014年上智大学客員研究員、2016年ハーバード大学客員研究員。現在は、メルボルンにあるディーキン大学准教授としてクリエイティブ・ライティングを教えながら、モナッシュ大学日本研究センター客員教員もされています。

最近の散文詩集に『ピカドン』(*Pika-don*, Mountains Brown Press, 2018)、『発掘』(*Exhumed*, Grand Parade Poets, 2015)、『トレース』(*Trace*, Finlay Lloyd, 2015)があります。



Vahni Capildeo

ヴァーニー・カピルデオさんはイギリス、ヨーロッパを中心に、国際的に知られる英語詩人。舞台でもご活躍。

オックスフォードの才媛で、同大学院では最も難しい言語のひとつと言われる、8-14世紀にスカンジナビア地方で使われた北ゲルマン語 (Old Norse) で書かれた古典を研究。

トリニダード生まれ。祖父方がインド系。インド系の人々はトリニダードでは少数とのこと。詩には、彼女や彼女の家が代々引き継いできた歴史、インド、トリニダード、イングランドが、まじりあい、土地と記憶があらわれています。



Jen Crawford

ジェン・クロフォードさんは、アオテアロア (ニュージーランドのマオリ語名) に生まれ、フィリピン、オーストラリア、シンガポールで暮らし、現在キャンベラ大学国際詩学研究所 (International Poetry Studies Institute) 准教授です。

作風は実験的。散文だったり、単語がページを浮遊したり。読んですぐに「あー、わかるわかる！」という感じではないのですが、セクシュアリティやマイノリティなどについて「もやもや」考えているんだけど、はっきり「これが正しい」とか「ここが間違っている」と断言できない、そういう感じをととてもよくあらわしている作風です。

詩集『オニカッコウ』(*Koel*, Cordite Books, 2016)、『地衣は石を愛す』(*Lichen Loves Stone*, Tinfish Press, 2016) など、8冊の詩集・チャップブック (小冊子) があります。



Niloofar Fanaian

ニルーファー・ファナイヤンさんは、ペルシア系オーストラリア作家・詩人です。キャンベラで出会った彼女は、実は旅する詩人。アメリカ、オランダ、タンザニアで暮らしてきたのよと笑い、「イスラエルに行くわ」とキャンベラを後にしました。

まだ日本には行ったことがないのだと、昨年から来日を楽しみにしてくださっていたニルーファーさん。ちょうど新詩集がでたばかりです。ペルシア語文化圏の伝統と、英語詩の伝統が混じり合った、彼女の詩の世界を味わっていただければと思います。

第一詩集『トランジット』(*Transit*, Recent Work Press, 2016) にて、キャンベラクリティックサークル文学賞詩部門 (Canberra Critics Circle Literary Award) を受賞。



Paul Hetherington

オーストラリアで知らない人はいない詩人、ポール・ヘザリントンさん。キャンベラ大学で詩の書き方を教える大学教授でもあります。偉いのに偉ぶらない、そんな言葉がぴったり。いつもやさしい笑顔の先生です。

13冊の詩集・散文詩集を発表。2014年には西オーストラリアプレミアブック賞詩部門（Western Australian Premier's Book Award）を受賞。



Ravi Shankar

受賞した文学賞は数知れず、すべてを紹介できないほどのラビ・シャンカーさん。ノーベル文学賞を受賞したアフリカ作家、ナディン・ゴードイマーさんから「美しい世界文学作家」と賞賛されています。

世界中を旅するシャンカーさんですが、「日本には行ったことがない」ということで、はりきって来日されます。

これまでに出版された12冊以上の詩集は、Pushcart Prize や Connecticut Book Awards など数々の文学賞に輝きました。タミール語からの翻訳詩集では National Poetry Review Prize を受賞。コロンビア大学や香港の大学などで教鞭をとり、BBC でコメンテーターを務めていたことも。



Melinda Smith

メルリダ・スミスさんは、キャンベラにあるオーストラリア国立大学で、法学と日本研究を修められました。在学中の1992年には、交換留学生として関西大学へ。「もう使ってないから全然駄目」と控えめにおっしゃいますが、日本語を読むのはとても上手です。

6冊の詩集のうち、『ドラッグしてロック解除／緊急電話』（*Drag down to unlock or place an emergency call*, Pitt Street Poetry, 2013）で、2014年オーストラリア総理大臣文学賞を受賞。作品はイタリア語やインドネシア語など複数の言語に翻訳されています。



Shane Strange

シェーン・ストレンジさんは、詩の出版社を切り盛りしながら、キャンベラ大学で教え、夜は詩の朗読会やら出版記念会やらで走り回る、パワフルな詩人です。

日本の銀行で働いていたこともあるシェーンさんは、変なところ（？）日本通。「変」といえば、よく日本の方から聞かれるシェーンさんの苗字「Strange」は、芸名でもペンネームでもありません。



Ellen van Neerven

エレン・ヴァン・ニーヴェンさんは、クイーンズランド州南東部のオーストラリア先住民族ユガンバ族の出身。今、オーストラリア国内の若手詩人として、最も注目を浴びています。

詩集『コンフォートフード』（*Comfort Food*, University of Queensland Press, 2016）はアマゾンでも購入可能。短編集『熱と光』（*Heat and Light*, University of Queensland Press, 2014）では、2015年ドビー文学賞（Dobbie Literary Award）をはじめとする複数の文学賞に輝きました。

写真はまだロングヘアですが、今はすっぱりと髪を切られ、ベリーショートがとってもお似合い。ちょっとシャイで、でも朗読はものすごく力強く、メッセージ性に満ちています。